

現代日本紀行文選全集

現代日本紀行文学全集

山岳編(上)

ほるぷ出版

現代日本紀行文学全集 山岳編(上)

監修 志賀直哉

佐藤春夫

川端康成

小林秀雄

井上靖

発行日 昭和五一年八月一日 発行

発行所

東京都新宿区新宿二一九一三
電話 東京〇三―三五四―七〇三一(代)

株式会社 ほるぷ出版

代表 山浦喜三夫

総発売元

東京都新宿区新宿二一九一三
電話 東京〇三―三五六―六二二一(代)

株式会社 ほるぷ

代表 中森蒔人

制作 東京連合印刷株式会社

目 次

北海道の夏の山	大島亮吉	3
斜里岳の旅	坂行直行	22
ニセコアンヌプリ	深田久弥	30
大雪山紀行	中西悟堂	35
狩勝峠	河東碧梧桐	44
北見峠	伊藤秀五郎	52
三股高原	加納一郎	55
美幌峠より阿寒へ	市河不二子	58
伝説の谷間	更科源蔵	73
八甲田高原	深田久弥	85
八幡平	田部重治	93
岩手山	辻村太郎	97
グダリ沼	井伏鱒二	99
仙人峠	沼井鉄太郎	109

関山峠 長塚節 113

鳥海山の春 深田久弥 117

東北の古典の山 長尾宏也 123

蔵王のふもと 亀井勝一郎 131

大東岳と蔵王 岡田喜秋 137

サビタのパイプ 木暮理太郎 142

会津駒岳、大津岐峠、銀山平日暮開墾

銀山平より会津の山旅 三田幸夫 157

桃源境檜枝岐村 中川善之助 165

尾瀬 武田久吉 180

男体山 深田久弥 193

奥日光交響楽 黒田初子 199

藤原の春 川崎精雄 203

霧の彼方 串田孫一 208

川崎隆章 147

上越境の山旅 藤島敏男 214

吾妻の溪より六里ガ原へ 若山牧水 224

浅間越え 寺田寅彦 239

浅間の四季 佐藤春夫 243

高原の自然 市河三喜 245

荒船と神津牧場付近 大島亮吉 254

妙義山 河東碧梧桐 268

赤城山の四季 関口泰 271

多摩川より秋川へ 田部重治 282

武甲山に登る 河井醉茗 287

大蔵高丸・大豊ガ丸 尾崎喜八 290

雨の雲取山 中西悟堂 297

北相の一角 武田久吉 305

初旅の大菩薩連嶺 小暮理太郎 328

笛吹川を遡る	田部重治	336
知々夫紀行	幸田露伴	345
奥秩父の山旅日記	小暮理太郎	358
美しき五月の月に	尾崎喜八	363
三ッ峠の岩場	藤木九三	366
八ガ岳	別所梅之助	371
霧ガ峰と蓼科高原	長尾宏也	376
七面山所見	井伏鱒二	384
新緑の富士の裾野	小島烏水	387
富士の冬	槇有恒	391
名山富士	松方三郎	394
丹沢山脈縦走記	田部重治	400
日本アルプス縦断記	長谷川如是閑	403

執筆者・初出紙誌一覧

434

山
岳
編
(上)

北海道の夏の山

大島 亮吉

然別と音更の水上の谷々と然別沼及び西

ヌブカウシヌプリに就いての紀行断片

一

北海道の山に就いては私はごく限られた一部分のところしか知らない。夏に内地から北海道の山へ行った友達や、または北海道にいて夏や冬や春、秋にいつも山へ行っている友達などから私はよく北海道の夏の山についての感想をきかされる。そしてそれは大体に於てあまり夏は面白くないと云うことだ。ヤブが深い。雪が案外すくない。山の形のやさしい火山が多くてゴツゴツしたものが少い。蚊やアブがたくさんいる。と云うのがそのまず誰れも云うところのあらましである。北海道の夏の山はいいと言う人もあるにはあるがまず少ない。それは雪のいい、針葉樹の雪に蔽われて一層おごそかに見えて、おまけにスキーにはいいスロープの多い北海道の冬の山は夏よりはずっとずっといいと私も思っている。いつ

もおしつけるような冬を過ぎてやってくる春はひと際^す他よりも北海道でも待たれるだろう。そののびのびとして、いろいろの北でなければ咲かない花などの一斉に咲き、新緑のかぐわしい北海道の春の山も、北の国の一層強く感ぜらるる秋の寂しい気持のよく味える北海道の秋の山も、皆夏と比べては好いには相違ないと思っている。けれども私は夏しか知らない。不幸にして私はまだ夏以外の季節に北海道の山へゆく機会を是迄持たなかった。そしてその割合につまらないと云われている北海道の夏の山に、他では一寸ないと思われるいいところがあるのを知って、いいと思った。いやな所もあるがそれと相殺してもまだいい所が残る。だから私は二夏^{ふたなつ}北海道へ行ったのだ。私はここで北海道の夏の山に肩をもつために、このつまらない紀行を書くことにした。

二

十勝^{としかかりべつ}の然別川^{おとふけ}と音更川（いづれも十勝の支流）の水上の谷谷を私は大正十二年の夏に約十日間ほど歩き廻って来た。北海道の夏の山のことをおもうと、いつも私は自分の経験したわずかのなかで、ある山頂から望んだひとつの展望と、ある深林のなかをこそそこそと潜り流れてゆくひとつの小さな水脈に沿うてのさまよい歩きとに対する興味深き印象の上によりみえらされる。それらのものとは嘗て過ぐる年の夏に、あの大河、石狩の水源をしてそこに発せしむるという石狩岳の秘奥なる頂からして、その直下はるかに拡がれる、森林は鬱蒼

として重厚に地を蔽い、谷々は陰暗にして深い音更川水上の流域を形づくる曠茫とした大盆地を瞰下した展望と、石狩川の水上をなす一側流ユーニシカリの流れに従いつつ、その広やかな流域を蔽う巨樹鬱々たる大森林を通ったときのことである。そして私はそのうち人煙を隔ること遠く、谷々のみな峽流をなして深奥であるといわれているこの音更の水上に対してはいつかまた機会があったならば、その谷々の流を深くさかのぼっては、あの盆地の暗鬱な、そして広大な原始林のなかをさまよな態度でさまよい歩いてみたいと思つてゐた。

去年（大正十二年）の夏の始め、いつかも一緒に石狩岳へ行ったことのある田中三晴君が十勝の然別川を遡つてニベソツより石狩岳への尾根伝いをして、音更に下る行程を辿るといふ計画をして岡本信三君とやると言うので、私は他に大賀道昌君、相馬康平君と共にその行に加えて貰つた。ところがまだ別に記録もないし、地形図も全部ないうえに、地図のうえでの計画が当はずれをし、土地のアイヌから聞いた話が少しちがっていたため、予定の計画はとることが出来ず、山らしい山の頂上は殆んど踏むことが出来なかつた。ただ谷を歩いたり湖辺で遊んで、最後に十勝平野の北の端にある、平野を一望のうちににおさめ得るような素敵に大きな展望をもった西ヌブカウシヌプリという千二百余メートルぐらいの山に登ったきりであつた。だから山登りとしては駄目だったが、私はこのことにはあまり失望しなかつた。ただオトブケの上流

がそんなに深くまたひどいものではないのと、ニベソツの山稜が石狩岳の頂上から見たときのように峻しい岩稜でないのには意外に感じただけだつた。

北海道の夏の山で私のいいとおもっている点は、まずその原始の匂いの多分にするような深い森林のなかをさまよい歩くことと、北海道の夏の山では常に自然の路であるところの川歩き——それもゆるやかにうねつては流れている浅い沢をピチャピチャと徒渉し歩くことである。それから荒々しい未開の自然のなかへ一步一步とはいってゆく人間生活の努力と自然との密接な暗示の働きがまざまざと親しく眺められるようなその開墾地特有な風景である。そしてなお、もうひとつには山へはいると殆んど人には会わないことである。人の歩いた跡さえも稀なことである。そんな点では、私はこの山歩きにそんなに失望はしなかつたのである。私はこの紀行を一部はあまり登山者として記録のないこいらの様子やトボグラフィイのために、他の一部は単なる自分のこの山歩きのあいだの印象や旅想ともいふべきものとして書いたつもりである。

三

この山歩きの日時と行程の概要はほぼ次のようなものであつた。（陸地測量部の地形図、然別沼、ニベソツ山、芽登温泉、芽登の四図幅を参照せらるればよくトボグラフィイの点はわかる。）

七月十四日

旭川を早朝出る汽車に乗って富良野の平野を過ぎ、狩勝峠を越えて十勝の新得駅に正午頃着いた。汽車から下りてそこで一時間半許りいろいろの買物などしてから、十勝平野の北の山の裾で、然別川の丘陵の間にある売幕（ほんとに云うとウリマツクというのだそうだ）という開墾村まで屈足村を過ぎ十勝川を渡って丘陵の上の柏の林の間につづく直線路の約総計五里ほどをひどい雨にうち濡れて歩いた。午後六時半に売幕についてその駅通に泊った。（陸測地形図、新得、然別沼参照、但し地図にない新道路を行った）。売幕の駅通では米味噌草鞋其他の物資をととのえることが出来る。

七月十五日

いろいろの荷分けや人夫を一人頼むために出発が遅れて売幕を正午過ぎに出発して、然別川の狭い丘と丘の間を河成平原を出でつぎるまで約二里北に開墾道路を歩いて、オソウシユ川が然別川にはいるところから急に両側に山がせまって深い深林の中に路がついていた。この路は以前の伐材事業をやったときのと然別温泉へゆく微かな路とがいき交ってついているのだが、中途からは甚だ不分明となつていゝる廢道だ。土地のものが一緒に行ってさえよく分らないような程度だ。然別沼から出てくるトーマベツと地形図然別沼図幅の上で、トーマベツのうえの最初の沢即ちヌブリパタシユベツとの間は、地形図上にも一カ所大きなガレが記されているが、其他大小三カ所もガレがあつて路も歩き悪かった。川を右岸に渡

つたり左岸にこえたりして漸く地形図上の「関造材事務所」という地点に達したのは午後六時半であつた。その夜はそこの廢屋に泊った。終日小雨が降つたり晴れたりしていた。

七月十六日

この日は終日シーシカリベツを過行した。初めはシーシカリベツがすぐ上で「ガンケ」になつていて通れないといふことなので、地形図上の然別温泉にゆく小径をさがしてゆくと、その小径は温泉よりくる小沢に當つたのでそこに荷を置いて、温泉を見に訪れてみると、意外にも人がいた。それが温泉の持主の老夫婦二人と湯治に來ているアイヌの親子二人とが居た。温泉は大したことはないが、こんな山中に人が居て経営しているのが不思議だつた。暫くしてそこから以前に荷を置いたところにかえつて、今度はその小沢をユーヤンベツにまで下つた。ユーヤンベツはウベベサンケヌブリの下の方からでてくる大きなゆるやかな沢である。ユーヤンベツを下つて漸くシーシカリベツに合してからは全く一途に邁行した。シーシカリベツは川のなかを歩いてゆくのに甚だ石が滑つたり、倒木が川のなかにころがって歩いて歩きにくい川のようにだつた。そして感じの暗い川だつた。ユーヤンベツより上流へ二つ目の二股の地点迄遡つたら日暮になつたので、その川べりの深林の中に露營した。この日は終日曇つていて時々小雨があつた。里程にしては一里半ぐらいしか歩いていなかった。

七月十七日

頃わずかに水のある地点に來たのでそこで野營した。

七月十八日

人夫の病氣がひどくなつて歩けないので、一日滞在して少しよくなるのを待つことにした。野營地は残雪のとけたすぐ後だったのでヌカ蚊がたくさんいて辛かった。終日いい天気だった。

七月十九日

野營地を早朝出發してホロカオトブケを下つてゆくと、九〇〇メートルの所で左から溜沢が入り、更に七四〇メートルのところからも左に沢がひとつ入つて、その下にはタキがあった。沢は歩きいい方だった。ホロカオトブケの本流との二股については午前十時だった。そこにはアイヌの古い小屋掛けの痕があつて野營にはいい場所だった。病氣の人夫をひとり、食料と共にそこに残して置いて、私たちはニベソツを登るためにその二股から本流を遡つて行つた。地形図を頼りにニベソツの下より出る源流へとぼるうち雨となつたので、一一六〇メートル付近の二股を左にとつて少し遡つた地点のガンピの林のなかに野營した。夜に大雨となつて大きな焚火も消える程だった。

七月二十日

夜中の大雨のため、翌朝は用意がおくれ、天候は雨は降らないが、霧が深い。食料の關係で翌日を待てないので相談の結果ニベソツを登るのをやめて下ることにした。正午には以前の人夫を残して置いた二股に着いて、全部でホロカオトブ

シーンカリベツを、露營地の上の二股は右へ、更に上流の二股を右へと遡行して水の尽くるまでさかのぼると、それから上は可成りのヤブが針葉樹の間に生えていて方向を定めるのに困難した。一箇所非常に大きな雪崩の痕があつて、樹の根こぎにされたものや泥と雪とのまじつて汚ないデブリが小山のように積み重つているところがあつた。私たちの目的としていた山稜の鞍部と云うのはウベベサンケとニベソツの尾根の一六四六メートルの独立標高点のある間にある最低鞍部約一四〇〇メートルのところだった。非常に苦しいヤブの急斜面をのぼつて目的の鞍部についたのは正午近くだった。そこからは石狩岳、ニベソツ、ウベベサンケ、及びホロカオトブケの流域がよく展望された。然しニベソツへつづく尾根は優松とヤブばかりで殆んど歩けそうもないうえに、残雪がみあたらない。このために私たちの計画であつた尾根を伝つてニベソツから石狩岳までゆくことは駄目になつてしまつた。尤も初めから石狩までゆくにはあまり尾根の上に高低がありすぎるとは思つていた。然し先年石狩岳の頂上からニベソツの尾根をみたときは鋭い岩稜だったのに、こつちからみたときそれと余りちがいが甚だしいのには一驚した。そこで計画をかえて、ニベソツだけに登ることにして尾根をゆくことはよして、一度ホロカオトブケに下り、更にその本流がニベソツの下から出ているので、それについてニベソツに登ることとした。この時分より売暮から伴れて來た人夫が非常に身体の調子を悪くした。鞍部から真北に下つて、三時半

ケを下り、地形図に出ている箱状のタキのある地点をすぎ、夕刻ホロカオトブケの幅広い礫の砂洲の上にテントを張った。ホロカオトブケは非常に歩きいい、そして美しい川だった。

七月二十一日

朝一時間ばかりホロカオトブケを下るとオトブケの本流と合した。そこへ来たとき、本流から下ってきたイワナ釣りに出会った。話を聞くと北大の藤江君一行と上流へ行つて昨日の正午に別れて下つて来たのだと言っていた。一緒に本流を下つて行った。メトセツに十時半頃ついた。本流は川幅が広くてどこを歩いていいのかわからないが、大体右岸を行つた。地形図に出ている関造材の伐木道をさがしてそれについて下つてゆくと道はだんだんよくなつて行つた。綺麗な白樺の純林などがあつたりして、午後四時二十分にヌカピラについた。私たちは然別沼へ行くのに、このヌカピラを遡つてヤンベツに下り、そうして沼へ出ようと思つていたのでしたが、例のイワナ釣りが、それよりも内待川をのぼつてヤンベツにゆく道があつて、その方が楽だし、ヌカピラは仲々悪くて容易にのぼれるものではないと教えて呉れたので、内待川を遡ることにした。そして元小屋まで下つてその清水沢駅通に泊つた。

七月二十二日

清水沢駅通より音更川の細長い河成平原の開墾地を下つて、奥上土幌の村を過ぎ東三線四十五号の地点で音更の本流

を涉つてから、然別山塊の高みへと内待川に沿うた道を登つて、その日は地形図の上に出ている本名造材事務所に泊めて貰つた。

七月二十三日

造材事務所から上流は径はほんの足痕ぐらいが残つていばかりであつたが、それに導かれて、最初の二股は右へその次の二股を左にとつて遡つてゆくと水がつきて針葉樹のなだらかな分水嶺に達した。それを地形図を頼りに西北にとつてゆくと自然と径はヤンベツの一流流へと下りて行つた。そしてそのゆるやかな流れを下ると本流に合し、更に行くと右よりまた一つの緩流が入つていた。それからはヤンベツはますます緩かに紆り流れて、分流がいくつも生じていたのが紛れやすかつた。然し然別沼の水辺に達して、そのヤンベツが沼にはいる入口にあつたアイヌの魚釣りの小屋と云うのにその日は泊ることにした。

七月二十四日

魚釣りの小屋を出発して沼の左岸に道庁がつけた測量の切明を辿つてゆくと、地形図上で右の沼の入り込んだ処の、岸辺の平な場所に道庁の林務課の測量テントがあつた。そこから丸木舟に乗つて丁度対岸に今年から開いたと云う然別温泉へ舟を借りに行つて、その舟でトーマベツの入口まで乗つて行つた。そこには一つの小屋があつた。そしてそこから地形図上の小径を登つて、東西ヌブカウシヌブリの間の「見晴峠」と俗に云つている峠に達して、峠の上から直ちに西ヌブカウ

シヌブリの頂上へ登った。頂上については午後三時二十分
で、そこより円い草原の尾根を少し下って千二百三十メー
ルの高さの頂上^{まへ}については三時五十分だった。そこは非常
に展望がよく、十勝平野から右手、背後の山々まですつかり見
えるので、長い間休んで四時三十五分にそこを出発した。そ
よりは草地の斜面を地形図の小径まで一直線にかけ下りた。
そして丘陵地をすぎ、売幕村の駅通については七時十分だ
った。

七月二十五日

売幕より新得まで歩き、その日の午後の汽車に乗った。そ
して北見の方へ行った。

入夫としては先年石狩岳へ行ったとき行を共にした成田嘉
助と高橋浅市の二人に、売幕で若い入夫をひとりたのんだ。

一行は田中三晴、岡本信三、相馬康平、大賀道昌の諸君と私
とであった。ニベツツの付近は測量部の地形図があつたの
で、私たちは安心して地図を頼りに歩けたのだった。

四

私は十勝の大きな平原がだんだんと西北をしきっている山
の方に近づくに従つて、低い丘陵^{おおか}の波をばゆるやかにうねら
している辺りの開墾地の殺風景だが、そのなかに一味の新し
さと寂しさを、しつとりさせたようなペイサージュをまた
なくいいと感じた。売幕^{ウリマク}や音更^{オトシゲ}の村があるあたりは特にいい
と思った。そこいらは緑の草一面の、まるで夢の様になら

かな線をうねらして丘が丘とつづいていた。そうして其うえ
には柏の林と白いガンビの粗^{あら}な木立とが、まるで緑の冠の
ようにしずかない点景をつくっていた。真^ま四角^{しかく}に黒々と土
の鋤きおこされた開墾地がその丘つづきのあいだの低いとこ
ろに際立ってみえて、その内部生活の悲惨さをばまざまざと
私らに思い浮べさせるような開墾者の貧しい住家がそのま
なかに佇^{たたず}まげな生活の水溜りをつくっていた。その住家――
それは節の多い木材と薄い壁土とで急造されたバラック小屋
よりももっとみすばらしく、汚れくさったものだった。そう
してそこいらは北海道には相変らずの直線的な幅の不釣合に
広い道路が、丘や流を真一文字に突切るようにして通じてい
た。ここいらあたりのこのような風景と、それからここいら
あたりに住んで開墾をしている人たちの生活光景とは、互に
相似通つてるように私にはおもえた。いろいろとみたりきい
たりしたところでは、ここいらの開墾者はそのまわりをとり
まく原野の景色とおなじように殺風景な、光明に乏しく不安
に沈溺した、全く根柢のない流浪の生活をしているらしかつ
た。その人たちはみな眼前の小利のためやまたはより大きな
外部よりの不正な強圧のために、徒^{むな}に自らの墾^{くわ}いた耕地を棄
て、或いは働くべき土地を奪われ、不当に搾取されては、憂
鬱^{うふく}を顔にし、貧窮を背後に背負つてこの曠野に流浪してい
るのだ。「大地を生命とするものの幸福」などという詩人のい
っているような幻想的な美しい幸福さのひとかけらだってそ
れらの人たちの生活の内部にはみあたらないであらう。私は、